

永井恒司先生を偲ぶ会 スピーチ原稿

本日はご多忙中にもかかわらず、永井恒司先生を偲ぶ会にご参集いただき、誠にありがとうございます。

本日、この会の委員長を務めさせていただきます、杉山です。

1. 先生ご逝去への哀悼

去る6月6日、永井恒司先生がご逝去されました。

生前の先生をよく知る私たちにとって、この訃報は筆舌に尽くしがたい悲しみでした。

本日、このように多くの皆さまとともに先生を偲び、そのご功績とお人柄を振り返る機会をいただきましたことを、心より感謝申し上げます。

2. スライド1

永井先生のご功績についてまとめました。より詳細はお手元の式次第でご覧頂けます。

永井先生は、1956年に東京大学医学部薬学科を卒業後、61年に同大学院博士課程を修了後、東大の製剤学教室の助手に就任されました。私自身が永井先生と初めてお会いしたのは、製剤学教室に学部4年生として配属された時です。その際の、大きな声と明快なお話ぶりに強い印象を受けたことを、今も鮮明に覚えております。

1971年に永井先生は38歳の若さで星薬科大学薬剤学教授に就任されました。

その後、1985年に日本薬剤学会を創設して初代会長を務めたほか、86年には日本人として初めて国際薬学連合（FIP）からヘスト・マドセンメダルを受賞しました。

1986年には今の公益財団法人永井記念薬学国際交流財団の前身となる財団を創立され、国際的な研究交流の推進に尽力してこられました。

ドラッグデリバリーシステム、DDS研究の第一人者として、日本DDS学会の発展にも貢献し、シクロデキストリン

学会の初代会長も務めました。また、教育者として 2001 年から 2004 年まで星薬科大学学長を務めました。

1996 年から 2 年間、永井先生は国際コントロールリリース、CRS 学会の会長としてご活躍され、1997 年に CRS のストックホルム大会では、ノーベル賞授賞式と同じ形式のオープニングセレモニーで会長の永井先生がらせん状の階段を颯爽と降りてきて、満員の参加者の皆さんに President speech をされた姿は誠にカッコよく、その光景は今も私の心に深くきざまれており、研究者としての道を歩むうえでの大きな原動力となりました。

また、1999 年には紫綬褒章を受賞されました。特筆すべきこととして、ロンドン大学、ライデン大学をはじめとして、世界中の 6 大学から名誉博士、名誉教授を授与されていることであり、国際的な評価の高さを物語っております。

3. 永井財団の設立とご功績について、もう少しお話ししたいと思います。

永井先生は、公益財団法人 永井記念薬学国際交流財団を設立され、薬学分野の若手研究者が世界へ羽ばたくための大きな後ろ盾となってくださいました。

この財団の助成を受けて海外で活躍する研究者は数え切れません。

こうした数々の国際交流は、先生の先見性と行動力がなければ実現しなかったものです。このたび、私は先生の志を継ぎ、財団の理事長を拝命することとなりました。重責ではありますが、先生のお言葉とお背中を思い出しつつ、全力で取り組んでまいります。

4. 個人的な出会いと若手研究者へのご指導、ご支援

スライド2

私は 1991 年に東京大学薬学部の教授となってから、永井先生には 35 年にわたりご指導を頂きました。

スライド左はFIPの会長だったKamal Midha博士と、シドニーのFIPでの写真、右はフロリダのNicholas Bodor博士との写真です。

永井先生とBodor教授は、約20年間にわたり Retrometabolic conference と呼ばれる国際会議を隔年に10回ほど、世界の各都市で開催されました。

スライド3

これは永井先生とMidha先生の頭文字をとってNM conference と呼ばれているBrain storming 会議のときの写真です。

お二人の先生が話しあって、我々薬学研究者が何をすべきか、どのような人生を送っていくべきかといことを、腹をわって話そうよ、という会話から生まれた、本当にユニークな会議でした。最初の会議はバーミューダ島で開かれ、私も招待されました。Benet, Rowland、Breimer, Amidon, Crommelin先生をはじめとする

そうそうたる先生が8名ほどあつまり自分の考えを語る会でした。心が洗われる会合でした。

Kamal 先生と奥様の Neelam さんの連名によるメッセージが、皆様のお手元の式次第に挟まれておりますが、その中から一部を日本語にて、ご紹介させていただきます。

「忘れられないひとときがあります。バミューダで一緒に海で泳いだ後、永井先生が立たれたあの岩——私たちが『永井ロック』と名付けた岩の上で過ごした静かな時間です。冗談や笑いから始まったその名は、やがて先生の強さ、存在感、そして私たちの人生における揺るぎない支柱の象徴となりました。永井先生は、複雑な状況にあっても明晰さを示し、混乱の中でも静けさをもたらし、常に尊厳を備えておられました。」

このメッセージを初めて拝読したとき、私は胸が熱くなりました。

Kamal 先生と Neelam 夫人のこのお言葉ほど、永井先生とい

う人間を的確に、そして温かく表しているものはないと、深く共鳴いたしました。

5. 先生のお人柄

永井先生は人情に厚く周囲を気かけながらも、研究や教育においては一切妥協を許さぬ厳しさをお持ちの方でした。温かさと厳しさ、その双方を兼ね備えたお姿こそが、先生のお人柄を象徴しているように思います。

国際会議の場では、その人間味がいつそう際立っていました。廊下ではいつも誰かと語らっていましたが、名刺交換だけで終わらせず「次は一緒にやろう」と具体的な道筋を描き、翌朝にはすでに関係者にメールを送っている—そうしたスピード感と面倒見の良さが、多くの共同研究や人的交流を実らせたのです。

1999 年のことです。夜 8 時頃、海外での FIP の会議に出席
されていた永井先生から突然国際電話をいただきました。
少々驚きながら国際電話を取りました。すると先生は、

「杉山くん、今、科学部門の委員の方々と話しているん
だ。FIP の科学部門の今の委員長は、杉山くんもよく知っ
ている Benet 先生だよね。Benet 先生は 2000 年のサンフラン
シスコでのミレニアム会議を最後に任期を終える。その
後任について議論しているのだが、多くのメンバーが、ぜ
ひ杉山くんを引き受けてほしいと言っている。杉山くんが
応じてくれたら、Benet 先生、Rowland 先生、Breimer 先
生、Crommelin 先生、Midha 先生、そして永井先生自身も
含め、全員でサポートし強い科学部門を作っていきたいと
思っている。ご家族と相談して、数日以内にぜひ良い返事
をしてほしい」

という内容でした。

当時の私は自信がなく、Benet 先生の後を継ぐ力が自分に
あるとは思えませんでした。しかし、永井先生がこれほど
強く推してくださっているという事実には大きな喜びを感
じ、翌々日にはお引き受けする旨のメールを送りました。

今振り返れば、これは私の人生における大きな選択のひとつでありました。思い切って飛び込まなければ何も得られない—そのことを数年後、実体験として理解できたのです。

スライド4

上は2002年にニースで開催されたFIP年会の後に永井先生ご夫妻と私の3人で、ドナウ川のクルーズをしたときのもの、下は2000年にウィーンで開催されたFIP年会において、Opera Houseでリラックスしているときのものです。ドナウ川の比較的小さな船でのクルーズはとてもリラックスできた時間でした。思えば、永井先生はこういう時には全く仕事の話はされず、ゆったりと自然を楽しみ、環境も人間もすべてを受け入れて下さる雰囲気を出されます。私事になりますが、幼い頃より父を亡くし、永井先生は時に父のような存在でありました。

威厳と包容力を兼ね備え、常に頼れるそのお姿は、私が心に描く「父親像」そのものでありました。永井先生から受

けた揺るぎない支え、そして先生が先生であったこと自体、そのすべてが私の記憶、精神、語り継がれる物語の中で生き続けます。

6. 奥様、清子様：

ここで少し、永井先生を長年にわたり支えてこられた奥様、清子様についても触れさせていただきたいと思います。

先生が 2011 年に脳梗塞で倒れられてから、リハビリを経て回復に向かわれる過程、そして車椅子を使いながらも国内外の学会へと意欲的に参加される際には、いつも清子様が寄り添い、支えておられるお姿を拝見してまいりました。永井財団の理事長としての活動を、ご夫妻で共に取り組まれる姿は、私たちに深い感動を与えてくださいました。

時には先生のご気性に寄り添い、時には叱咤し、また時には優しく受けとめられる—そのお姿は、周囲にご夫妻の絆

と愛情の深さを示してくださいました。先生が倒れられてからの14年間で、これほどまでに充実したものにされたのは、まさに清子様の支えがあったのことと存じます。

また、情報系の科学者でもあった清子様は、メールやオンライン会議の環境でも先生を支えてこられたことは、皆様もよくご存じのことと思います。永井先生のすべてを理解し尽くされた清子様がそばにおられたからこそ、この14年が豊かで実りある時間となったのだと思います。

清子様。どうかこれからは、ご健康に気をつけながら、ご自身の人生をゆっくりと楽しんでいただきたいと、心から願っております。永井先生を愛してきた私たち一同、いつでも清子様のお力になりたいと思っております。

7. 結びにあたって

本日の偲ぶ会において、先生の大学での研究・教育、国内外の学会活動、財団を通じた研究・教育支援の数々を、皆

さまと共に振り返ることができますことを心より嬉しく思います。

そして今後は、先生が私たちに示してくださった「信念を貫く姿勢」を、後世にしっかりと引き継いでまいりたいと存じます。

最後に、永井恒司先生のご冥福を心よりお祈り申し上げますとともに、先生の築かれた世界に羽ばたく道を、私たち自身が、本日ご列席の皆さまと共に歩み続けることを、ここに誓い、追悼の言葉とさせていただきます。

永井恒司 先生；

先生からいただいた教えを胸に、これからも日々を大切に生きてまいります。

皆様：最後までご清聴いただき、ありがとうございました。